

古墳時代を彷彿とさせる沈黙の橋板

初田川にかかる阿弥陀橋は、かつて道行く人々の安全を祈願して造られたと伝えられています。橋のたもとに建立された碑によれば、昭和四十四年の改修時までは橋板として使われていたとか。板石は沈黙を守りながらも、香芝の歴史の一端を語ってくれているようです。

阿弥陀橋には古墳時代中期のものと思われる長持形石棺蓋石と石棺材、石室の天井石があります。石棺のなかでも長持石棺は特殊なもので、大規模な古墳にしか使われません。阿弥陀橋の板石が全長三メートル以上もの長さがあったことから推測すると、約二〇〇メートルもの大きな古墳の存在が浮かび上がってきます。香芝市周辺でそのような大規模な古墳は発見されていませんが、香芝が天皇の墳墓に深くかわりのあったまちであることが推測されます。

およそ二千年前のことです。垂仁天皇の命により、當麻の蹶速と出雲の野見宿禰が相撲をとりました。

蹶速は組打ちして倒すことでは天下一でしたが、足でけり倒すことを得意としている野見宿禰に肋骨を折られ、倒れたところをふんづけられて腰骨まで折って負けてしまいました。阿弥陀橋の西方四〇〇メートルほどの「腰折」という地名は、蹶速が腰を折ったことに由来するとか。

勝利した野見宿禰は、天皇から蹶速の領地を賜り、その子孫が後に天皇の埋葬関係の仕事を担当する土師氏になります。土師氏は、古墳の造営や埴輪の製作などにはなならない存在でした。

遠い昔、この香芝の地に土師氏の一族がいたと考えれば、狐井城山古墳をはじめとした古墳が点在するのにも納得がいきます。

古代の歴史ロマンが息づく香芝。阿弥陀橋の石板はどのような古墳から持ち運ばれたのか。それは現在、石板のみぞ知る謎となっています。阿弥陀橋は歴史のヴェールに包まれ、今も往来する人々を見守り続けています。

